

〔学 会〕

東京女子医科大学学会 第116回例会

日 時 昭和37年12月7日(金)午後2時より
場 所 東京女子医科大学本部講堂

1. 細菌性赤痢のアクロマイシン少量投与による治療成績

(三神内科) 沢井明子

従来細菌性赤痢に対して、抗生物質の大量療法がおおむね無批判に行なわれていたが、1954年桂教授が本症に対し抗生物質少量投与療法を発表して以来、本法は世の注目をあびるようになった。私も桂氏法の追試を行ない、少数例ではあるが好成績を得たので報告する。

患者は昭和36年9月より、37年8月迄の間に当内科に入院した20名である。なお対照として昭和36年に大量投与を行なった者、20名を選び、比較検討した。

投与剤は、アクロマイシンVで、投与方法は、成人1日量100mgを2回分服、6日間投与した。検査項目は、解熱、便回数、便性状の回復、菌陰性化に要した日数、再排菌、遠隔成績、および耐性菌についてである。

治療成績は、少量投与群は大量投与群に比し一般にすぐれているように思われた。なお本法は、有効、適切と考えられるので、更に今後症例を重ね、検討をつづけたいと思う。

2. 左心症のレ線症例

(放射線) 〇島津フミヨ

(心研) 高尾篤良・豊田義雄

(至誠会病院) 沖文恵・清水五百子

孤立性左心症(Levocardia)は、心臓は正常位(左胸部、心尖は左に向う)にあり、腹部内臓の完全あるいは不完全転位を伴うもので、しばしば心奇型を認めるといわれ、ことに、チアノーゼを伴う重篤な心奇型の合併が多い。(Diliopoulosによれば95%にチアノーゼを認めるという。)

本症は稀な疾患であるが、当大学の心臓血圧研究所ではその特殊性のため、本症に時に遭遇することがある。演者らは、このうち血管心臓造影法を施行した6例についてその大略をのべ、なお、最近至誠会第二病院を訪れた1例について、主としてX線学的所見を基礎とした検

査成績について報告した。

3. ニトログリコール中毒に関する実験的研究

(法医) 〇阿部和枝・猪熊タイ

Met-Hb形成毒と言われるNg(ニトログリコール)を用いて、その中毒家兎について、Met-Hb量とHeinz小体出現の時間的変動、およびNgを長期間投与しつづけた場合の血清蛋白分劃の変化を観察した。

Ngはオリーブ油に10%の割合に溶解し、これを200mg/kg1回皮下注射後時間を追ってMet-Hb量とHeinz小体の出現状態をみると、Met-Hb量は注射後30分で既に証明され、1~2時間後に最高に達し、数時間後には殆ど流血中から消失する。Heinz小体はMet-Hbの消失し始める頃より微細な点状顆粒として認められるようになり、漸次その数と大きさを増す。すなわちこの実験ではMet-Hb形成がHeinz小体出現に先行したが、この両者の間には何らかの関聯があると思われた。

一方Ngを160mg/kg、80mg/kgの割合に2カ月間連日皮下投与し続けた家兎血清蛋白分劃を濾紙電気泳動法により観察すると、注射後1週間でAbの増加、 β - γ -グロブリンの減少が起り、A/G比は上昇、2週後3週後とこの傾向は顕著となり実験前値の2倍以上に及ぶ高値を示した。このことは一般疾病時には殆ど認められない現象と思われる。しかし、4週頃より漸次 β - γ -グロブリンは増加しはじめ5週乃至7週後にはA/G比はほぼ実験前値に戻るが、かえって低下を示した。今後この現象の発現機序について、肝機能、網状内皮系の変化との関聯で実験的に追求する。

4. ラット精巢のいわゆる間細胞について

(解剖) 大田 豊

当教室においては種々の実験を行ない、主にラット精巢の精細胞について検索を試みて来たが、間細胞の所見を追及してみようと考え、既に報告されている文献のうち、生体染色の実験の追試を行なつてみた。